

喜多村俊夫先生のご逝去を悼む

「遊仙」——これは喜多村先生の還暦のお祝いに同窓生が「書」にしたためてお贈りした言葉である。ふっくらとした布袋さまのような、そして食通の先生は、霞を食って痩せ細ったイメージの仙人とはほど遠いお姿であったが、なぜか遊仙というと喜多村先生しかいないと思えるのが不思議である。その先生が1993年10月24日夜、ご自宅で食事中に食物が喉につかえたことによる窒息のため急逝された。享年82歳、謹んで哀悼の意を捧げます。

喜多村先生のご略歴およびご業績については、ご一緒に名古屋大学文学部地理学教室を運営なされてきた井関弘太郎教授により「地理学評論」(Ser. A)第67巻第3号(1994)に紙碑として詳しく載せられている。故に、ここでは重複を避け、先生にご学恩を受けた一学生として、かくれたエピソードを二、三紹介して、より多くの方々に、より親しみをもって喜多村先生を偲んでいただければと思う。

ふろしき包に原稿用紙をつめて岩波に乗り込んで、出たのが『日本灌漑水利慣行の史的・総論編』(岩波書店、1950)、『同・各論編』(1953)。その審査員が東畑精一教授で、「これは20年は持つ」とのお墨付をいただいた、と喜ばれた。また『新田村落の史的展開と土地問題』(岩波書店、1981)については、古島敏雄教授に第1章の新しさを高く評価してもらった、とご満悦であった。これに対して、晩年の大作『日本農村の基礎構造研究』(地人書房、1990)については「これはあきません」と卑下されていた。単行本に上梓するには、現地を再訪して資料を見直さねばならないが、それができないままに発行されることになった無念さからであろう。出版前にどうしても絵図がみたい、そして私が運転して岡山までお連れすることになったのだが、近江堅田の先生のお宅にお邪魔した時は、足が随分弱られていて、長時間のドライブは無理であった。奥さんが「溝口さんにお頼みになったら」と言われた時、血相をかえて「本人がいかにでどないするんや」と叱責された。

史料現地筆写主義、これが喜多村先生の哲学であった。米を担いで全国を歩く。安く泊って長期滞在。有名教授が史料を借り出したままそれが返ってこないという話はいやというほど聞く。そんな中で喜多



村先生の「史料は(所有者)の命や」という声、今でも耳に残っている。

さて、先生の講義であるが、特殊講義、古文書講読、地図演習、どれも授業にならなかった。講義は古きスタイルの読み上げ、筆記型であった。でも読み上げて5分もすると「えー馬鹿話を……」と脱線、それが最後まで続く。だから私にはノートがない。古文書講読では史料を机において読むのだが、これは1分もたたないうちに、先生がご自分で読んでその世界に入って行ってしまわれた。だから卒業までに古文書が読めるようになった学生は1人もいない。地図演習は土地利用図作りであった。学生が選んできた5万分の1図を見て「ははん、この町からは女郎さんの色香が匂ってきますなあ」という具合。地図に香りがあるとは!

大学の先生の部屋は書物・資料の山であった。ドアをあけると中央の大きな机の上が山となっており、左奥、窓際に座ってみえる先生のお姿は拝見できなかった。ご葬儀の際に見せていただいた堅田のお宅の小さな書斎も、まさに研究室の再現であった。この山を崩すのは辛い、後世の方に利用できるようにとのご遺族の依頼で、整理することになった。一周忌までに「喜多村文庫」を誕生させたい。

では、最後に一生を水利研究に捧げられた喜多村俊夫先生、戒名は「教普利水俊徳居士」、にあらためて合掌。

(1994年3月、溝口常俊)